

〈企画・監修〉  
「ベンさんを偲ぶ会」実行委員会  
〈発行〉  
(一社)シーニックバイウェイ支援センター

北海道功労賞記念誌「受賞に輝く人々」寄稿文より  
日本・北海道とアジアの架け橋・  
ベンさんの武士道的生き様

和泉 晶裕（国土交通省北海道局長）



私が西村紘一さん(以下愛称「ベンさん」で表す)に最初に出会ったのは、二〇〇五年一月、寒き厳しい札幌の地でのこと。「純粹」「先見」「覚悟」「全力」「発想」「熟慮」など今思い浮かぶ単語だけでは表現し得ない印象、いや衝撃を受けたことを覚えていいる。

敢えて例えるなら、札幌農学校二期生新渡戸稲造の言葉を借りたい。明治十六年新渡戸は東京帝国大学の面接で「我、太平洋の架け橋とならん。日本には日本の長所があり、西洋には西洋の長所がある。お互いの国の長所を伝え合い、世界の国々が仲良くし、ともに向上していくようにと願う。そのため、橋わたしの役をしたい」と語ったところ。まさにそれと同じことを現代で実践し、常に日本と世界を見続けている人でもある。

## ベンさんの生い立ち

ベトナム戦争の中、英字新聞の広告「横田米軍基地勤務」を頼り、梅田の書店を後に東京へ。米軍人の面接で「どんな任務にも就く」と訴えた。戦地で死ねばUS15万\$ (当時1\$ = 360円) が支払われることから、何かあっても母や弟妹の将来も安心だと考えたからだった。しかし、横田基地にいたことが戦争に加担している気がして、再び大阪へ戻り「ノースウエスト航空」に入社する。

\*\*\*

「ノースウエスト航空」を三年勤めた後、一九七二年アジアの新鋭航空会社「マレーシアシンガポール航空」に請われ、入社を決めるその八月には現在の「シンガポール航空」(以下SIA)として分社独立)。東南アジアの航空会社はまだ信用がななく、初フライトは乗客八名のみ、の惨憺たる

ベンさんは、一九四三年に熊本県に生まれ育つが、父親の事業が失敗し、中学一年の時、大阪に転校。生活は貧しく、借金取立人が容赦なく家財道具を持っていく日々が続いたことから「自分が働いてなんとか弟妹だけは学校に通わせたい」と思い、高校一年のとき一冊の本を携え家を出る。その本は特攻兵の家族に送った手紙集「きけ、わだつみの声」だ。敗戦を知りながら、残す人々を想いながら特攻した学徒に心打たれ、「申し訳ありません。必ずいい国にします」と誓ったという。この頃、既に日本を想う気持ちが芽生えていたのだ。

高校時代は新聞配達所に住み込み、大人の二倍の軒数を配り、家に仕送りを続けた。大学生になると大阪梅田の小さな書店を任せられ、書店としては日本初の深夜営業を始め、坪当たり売り上げが西日本一になる。そして書店の営業が終わる十二時過

出発に。大阪国際空港に乗り入れる十四社中、最下位の会社だった。そこで、ベンさんは格安攻勢をかける。翌年SIAはN. 1のJALを破り、搭乗率トップへ躍り出た。その後も連勝が続き、それが認められ入社三年で課長、部長、西日本営業部長へ昇進する。しかし、SIAの会長に頑張っている部下を批判され、それに反発し解雇になるが、日本支社長が「西村は首にしたが、ベンを雇った」と言い、そのアシスタントとして東京で再び採用される。三十三歳で美質SIA日本人の中でトップであった。その後本社アジア部へ転出し、東京・シンガポールの直行便実現のため奔走。ニーズの少ない路線の就航に懐疑的な上層部に対し「マーケットは創るもの」と説得。実現した直行便は初フライトより二週間満席となった。

SIAに入ってから、全力投球で大阪、東京そして本社で実績を積ん

ぎ、日雇い労働者のリーダーとして当時四kmの長さの地下商店街と汚物が詰まるトイレのマンホール内を国鉄、阪急、阪神の終電から始発の直前まで四年間三三五日一日も休まずに清掃した。

その一方で私塾「チャーターズ」を主宰し、「どんな職につけどもリーダーであれ」と説いていた。二三歳の時には仲間とともに、タイ、マレーシア、シンガポールの三か国の大学を訪問。過去の戦争による日本の占領を詫び、「これからのアジアの平和と繁栄を我々青年の手で築いていこう」と語りかけた。その青春時代の夢いっぱい旅が、今のベンさんの世界と日本をつなぐ架け橋になる想いの始まりだった。

## ベトナム戦争時代から航空会社へ

だが、東京・シンガポールの直行便が実現し「使命完了」と理解し、自らSIAを辞する。

## プライムトラベルの変遷

一九七九年シンガポールで「プライムトラベル」を創業する。主にソニー、松下電器、現パナソニック)、シャープ、ファイザー製薬等の日系企業の業務渡航を手掛け、会社売上げも伸びず。創業三〇年目にあたる二〇〇八年にはシンガポール中小企業九万社でN. 4に名を残すまでとなった。だが、その道のりは挑戦の連続であり、決して順調とは言えなかった。

東京、ロサンゼルス、ブリスベン(豪)、ベトナム、香港、上海と海外にも支店を拡げる中、一九九一年にはゴルフ場建設事業でのパートナーが倒産し、保証人だったために全財産を



失い、全地域より撤退を余儀なくされた。それから十五年の歳月をかけた借金を完済する。

その後はクアラルンプール、バンコク、上海、札幌、ジャカルタと新興市場等への拠点展開を再挑戦し、現在は、シンガポール、クアラルンプール、札幌の三か国三都市で展開している。

一九八九年には現在の「プライムクルーズアジア」という豪華客船の世界航路を販売する会社（日本とシンガポールでのクイーンエリザベス二世号総代理店）を、そして二〇〇〇年に日本旅行の専門ブランド「Follow Me Japan」(以下、FMJ)を立ち上げ二〇〇八年に独立会社へ分社。全ての会社グループ三社総勢八二人が今日の「プライムトラベルグループ」である。

旅行会社という業態は、国際経済や災害、伝染・感染症などに大きな影

実際に見聞きした状況に心を痛めていたからだ。会議、懇親会とベンさんとの話は尽きることなく、深夜にまで及んだ。そして、ベンさんは、北海道を売りだそう、何かの役に立ちたいと決心し、ドライプツアーの催行を約束してくれた。

私は二〇人前後のモニターツアーをイメージしていたが、ベンさんの「ムーブメントは創るものだ」との発言から、日本で初めての外国人ドライプツアーは、一六二人乗りのA320機のチャーター便となり、二〇〇五年六月に満席で新千歳空港に降り立つ。

新千歳空港のトヨタレンタリース二社により、公道から集めたエスティマ四九台がツアー客を迎え、スタートした。ツアー行程は、最初であることもあり移動距離を短くし、道央圏を中心に支笏湖、洞爺湖、ニセコ、小樽、札幌、富良野などを周遊。移動はレンタ

響を受ける。二〇〇二年からの新型感染症SARS、二〇〇八年のリーマンショック、二〇一一年東日本大震災などが起きる中、何度も危機にあいながらも、ベンさんは最後まで諦めず、必ず答えを見つけ出す姿勢を貫くとともに、逆境を好機に変えるくらいの発想力と経営手腕で、暴風雨圏を通り抜け、二〇一九年で四〇年目を迎える。

### 日本への想ひ Follow Me Japan(FMJ)

日本旅行の専門ブランドFMJは二〇〇〇年、娘の理佐さんが「日本とシンガポールの架け橋となり、もっと交流の機会を作りたい」と提案したことから始まったが、二〇〇八年独立会社「Follow Me Japan」で成長するに至った経緯に、北海道が果たした役割は大きかったと自負している。

二〇〇五年一月、札幌での「シー

カー毎に自由だが、宿泊は全員が同じ旅館と決めていた。移動中や宿泊場所では、FMJスタッフがルート案内、観光地情報、天候、交通ルールなど最大限のサポートをする事で、北海道での運転に慣れないシンガポールの方々に安心感を与えていた。そして、このツアーは大好評のうちに終わり、これをきっかけにFMJは北海道のドライプツアーを本格的に売り出すこととなった。



写真1:大幅に  
デスカウ  
ンされた  
最初の  
ター募集  
広告



写真2:全車同型の  
エスティマ  
でスタート



写真3:最初の  
ツアー参加  
者



写真4:高橋知事  
を訪問する  
ベンさん(最  
左)、チャー  
ター機のバ  
リュエア会  
長リム・チ  
ン・ベン氏  
(左から二  
人目)



同年九月、シンガポールでの旅行商品販売フェア（NATASフェア）に参加したブライムトラベルグループは、北海道のドライブツアーを全面的にPR。美しい風景写真と「北海道」の文字が浮かぶライトボックスを何台も設置したブースが印象的だった。（写真五参照）。当時のシンガポールでは、北海道は「ウィンターワンダーランド（冬のおとぎの国）」として有名だったが、これがきっかけで夏のドライブ旅行の素晴らしさが認知され、北海道人気に火が付いた。



写真5:2005年9月のNATASフェアでのブライムブースのライトボックス

これ以降、全道を対象に一週間から十日間ほどのツアーを何度も行っているが、単なる観光地巡りだけではなく、シーニックバイウエイ北海道に参加する各地域の団体の協力を得て、着物の着付け、生け花、スノーシュー、ドライブで排出するCO<sub>2</sub>削減のための植樹活動などを行い、シンガポールの旅行者と地域の交流を仕掛けていった。

その結果、北海道の外国人によるレンタカー利用は、訪日客の個人型への変化と相まって、二〇〇五年に数百台程度であった市場は、二〇一〇年で道内一万台を越え、二〇一八年には約十万台にまでまわっている。二〇一五年がまさに北海道ブームの元年であった。

FMJでは、ドライブツアーのノウハウを全国に展開。南は沖縄までのツアーを企画し、現在に至っている。特にレンタカーツアーは、公共交通

機関が不便なところへアクセスすることが可能なため、外国人があまり訪れない地方への誘客策として有効なことから、全国の地理的ハンディキャップのある地方公共団体の首長らがシンガポールのFMJを訪れ、ツアー誘致の要望を訪れるようになる。

その成果を評価され、ベンさんは二〇〇八年に国土交通大臣より「Yokoso JAPAN大使」（現VISIT JAPAN大使）に任命された。

\*\*\*

二〇一五年には、ドライブツアー十周年を記念して、鹿児島発北海道・帯広市到着の三〇泊三二日の日本縦断記念ツアーを企画し、最初のチャーターによるツアーに参加したツアー客も参加し、幕別町更別モーターパークのサーキット上でゴールを飾る。

## 日本の地域との架け橋へ

FMJの「My Dream My Journey」というツアーのキャッチコピーは「夢」と「旅」の関わりとその大切さを表現したものであり、これに基づいてFMJ全体の業務運営がなされている。つまり、ベンさんの生き様とFMJの事業は密接に繋がっているのだ。

全国の首長らは、シンガポールのFMJを訪れたことをきっかけにベンさんという人物像を知り、惚れ、そして「地元でベンさんに話して欲しい」と招聘するものが多くなる。ベンさんもそれに応え、各地に出向き北海道と同様、地域の実情を知るとともに、FMJは地域の人達と連携した多くのツアーを送り出してきた。

東日本大震災と向き合う、  
震災後世界初のツアー、  
そして陸前高田、南三陸の方々

二〇一一年三月十一日に発生した東日本大震災は、日本への送客が順調だったFMJにとって、全ての予約がキャンセルとなり、全くツアーが出せなくなかった。経営上、厳しい状況にも関わらず、ベンさんは「世界で最初にシンガポールから送客すること、日本は東北を除くほとんどの地域が平常に戻っていることを証明したい」と発災後わずか二ヶ月ほどの四月末に団体ツアーをシンガポールから送った。

常に日本を、そして地域を想うベンさんの気持ちは、震災時にも変わることはなかった。

しかし、東北では外国人観光客はなかなか増えない状況だったことから二〇一六年始めに復興庁による東北観光アドバイザー会議が設置され、理佐さんが委員に就任した。その会議がご縁で陸前高田の市長がシンガポールのFMJを訪れ送客を要請。東北の復興のためにと、同年十月

にシンガポールから東北へのツアーが実現する。



写真6:東日本大震災後のツアースタート



そのツアーでは、観光地を巡るだけではなく、現地で復興に取り組み陸前高田市の人達や牡蠣の養殖漁師、南三陸ホテル観洋の旅館の女将ら震災の語り部の話を聞いてもらったという。地震や津波の体験談だけではなく、力強く復興に取り組む姿を目の当たりにできたことは、ツアー客にとっても忘れられない訪問となったに違いない。

新しく整備された「陸前高田市コミュニティセンター」は、シンガポール赤十字の寄付を得て、建築家丹下健三氏のご子息で、シンガポール在住の日本人建築家・ポール丹下氏の設計によるものであった。

ベンさんの国同士の相互理解の醸成とは、単に名所を訪れるだけではなく、このような辛い経験の共有など、互いの国を理解するために大切なことをツアーを通してきちんと伝えることでもあった。

### 子供たちを生まれ変わらせる力 鳥取県鳥取市東郷小学校との 交流を通して

二〇一五年、ベンさんは鳥取県で講演を行ったことがきっかけで、鳥取市東郷小学校のPTAと知り合い、FMJのツアーが同校を訪れ、小学生との交流が始まった。

東郷小学校は、人口減少が進む地方の限界集落の小学校と同様に生徒数が激減。三〇年前には二〇〇人いた生徒数が二六人となっていた。ベンさんは、その現実には衝撃を受け、二〇一七年四月FMJのツアー客と東郷小学校を訪れた。そして、子どもたち、PTA、学校の先生を前に自分の生い立ちや経験、日本への思いなどを講演。東郷を出て、東京や大阪などの大都市に行ってもいいが、それは自分を磨くためであって、将来は東郷に戻ってきて、この地域をよ

くするために大都市へ行くんだよ」とメッセージを伝えた。子どもたちもツアー客を音楽演奏でもてなすなど、双方に心が通じる時間となった。この光景を見ていた校長先生は思わず嗚咽して泣きじゃくったという。理由は「三週間前に転校してきた生徒が、一度も友達と話せていなかったのにしゃべりだした」ことに感動したからであったという。東郷小学校は一八人が東郷から、それ以外は理由があって他地域から移ってきた子どもたちが多かったのである。

その年の八月、ベンさんは、二〇人の子どもたちとその保護者や先生を、翌二〇一八年十月には前年参加できなかった子どもたちをシンガポールに招待。言葉が話せないながらも、子どもたちは地元の小生との交流を楽しんだ。帰国した子どもたちは、大きく成長し、外国人に対しても臆することなく対応できるようになったと

いう。シンガポールでの経験が自信となり「誰でもヒーローになれること」を体感し、自ら変わっていったのだ。

### 北海道シンガポール 友好協会の設立

二〇一八年二月、ベンさんの「北海道功労賞」受賞を機に、私たちは有志にて北海道シンガポール友好協会を設立し、これまで多くのシンガポール観光客を北海道に連れてきて、シンガポールと北海道の架け橋になったベンさんに会長となって頂いた。

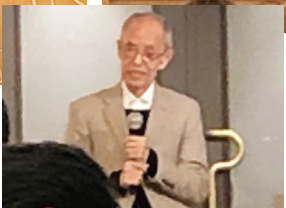
設立総会と合わせ、最初の活動としてシンガポールでの「日本語スピーチコンテスト」入賞の高校生三名によるコンテストで発表したスピーチや日本語でのシンガポールの紹介をしてもらった。今後も活動を活発化し、北海道とシンガポールとの交流を深めたいと考える。



写真7:鳥取市東郷小学校での1コマ



写真8:「日本語スピーチコンテスト」にて





## ペンさんから学んだこと

ペンさんは人が変わるきっかけを求め続け、ペンさんと触れ合うことで多くの人が変わった。

私がペンさんと十数年來お付き合いする中で、学んだことは多い。

・勉強(データから導かれる発想力)

新聞雑誌などを読み解く力、そしてその分析力、発想力がすごいが、データに裏付けされた現状分析とそれをもとに先を読み、先入観をもたず新しいものを生む発想力を持つこと。

・社会に波を起こす大きなムーブメントを常に考えていること

行動を起こすときは、大きな波を起こすための仕掛けを常に考えて行い、その結果、波は長期的に続き、事業の柱となっていくこと。レンタカーのドライヴ観光がまさにその例

である。

・窮地に追い込まれた時は、考えて、考えて、考え抜くことについて

会社が危ない時も常に諦めず「必ず答えがある」と信じて考え抜くこと。SARS、リーマンショック、東日本大震災など大きな波に巻き込まれたときも常に答えを探し、諦めない精神を持つこと。

・常に人と向き合い、優しさを持ちながら相手の求めることの実現を考えられることである。

## おわりに

ペンさんから学ぶことがまだ数多くある。人口減少が進む北海道が生き残るためには海外との交流をより拡大する必要があり、これからも北海道がシンガポールだけではなく、世界とどう付き合っていくか

「山だと思いきや越えてきた山は振り返れば丘でもあった。苦しくて当たり前。悩まぬ人生もなしましてや今の世の中。人は困らなければ動けない、それなら困ったことを幸せたと自分に言い聞かすこと。何故なら困ると何とかしようと思える。若い人は辛い道と楽な道があれば、辛い道を選んで欲しい。あとに知恵が蓄積されるから。」と。

## 追悼

本原稿の校正が送られてきた翌日(平成三二年三月七日午前九時五〇分)シンガポール時間(ペンさんは不帰の客となった。北海道功労賞授賞式に参加できたことが奇跡的であった)と思わずにいられない程、シンガポールへ帰国後、体調を崩され闘病生活を送っていた。

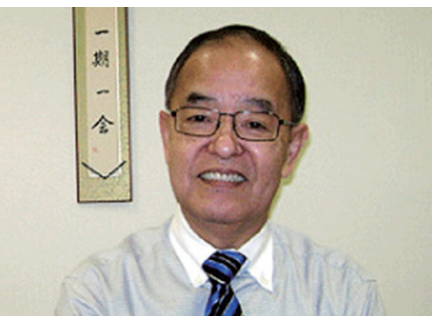
本原稿を「自分より和泉さんの方が私のことをよくわかってくれていて」と大変喜んで頂き、病床においても娘の理佐さんに読んでもらって「まだ北海道でやるべきことがある」と再起への勇気を湧かせ、病と闘ったがその願いは叶わなかった。

もうペンさんのご指導を頂くことは叶わなくなった。しかし、ペンさんはこれまで多くのことをこの日本、いや世界に残してくれた。私たちは

ペンさんが望んだ「世界に開かれた日本・北海道の実現」のため更なる努力を惜しまないことがその想いに報いことになるのだと思う。

「日本とアジアの架け橋」となったペンさんのご冥福を心からお祈りしたい。

本当にありがとうございました。



西村 紘一(にしむらこういち)

昭和18年12月 熊本県に生まれる

- ◇ 43年 3月 大阪商業大学経済学部経済学科 中退
- ◇ 43年 5月 ノースウエスト航空 入社
- ◇ 45年 7月 シンガポール航空 入社
- ◇ 52年 7月 シンガポール航空本社(シンガポール) 異動
- ◇ 55年 1月 プライムトラベル 設立
- 平成17年 6月 フォロミージャパン 設立
- ◇ 20年 6月 YOKOSO!JAPAN大使就任(国土交通省)
- ◇ 29年 4月 地球の歩き方総合研究所所長